

機関番号：16301

研究種目：若手研究（B）

研究期間：2007～2010

課題番号：19720193

研究課題名（和文）中世初期イングランドにおける地域社会の形成—ミッドランドの社会経済ネットワーク—

研究課題名（英文）The Formation of Local Societies in Anglo-Saxon England: Socio-economic Networks in West Midland

研究代表者

森 貴子 (MORI TAKAKO) 愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：10346661

研究成果の概要（和文）：考古学の成果を取り入れつつ文書史料を再検討した結果、10世紀以降に顕著な都市的發展に伴い、都市ウスターと周辺農村との経済的ネットワークが形成されていく様子を浮び上がらせることができた。また、9世紀頃から現れる新たな文書実践に注目したところ、地縁や友情など多様な契機で結ばれた人的結合関係が重要な社会的機能を果たしたことが判明した。以上の作業を通じて、中世初期を封建制・荘園制の形成期とする従来の見方に対し、モノや人の結びつきが創り出す動的で立体的な社会像を、「地域」として理解する必要性を提唱した。

研究成果の概要（英文）：As a result of reexamining charters with achievements of archeological investigation taken into consideration, I clarified the formation of the economic network linking the city of Worcester and surrounding rural villages, which was accompanied by the urban development from the 10th century onward. At the same time, it has turned out, through examinations of chirographs that began to emerge in the 9th century, that human ties mediated by friendship, regional bonds etc. played important social roles. On the basis of these studies, I proposed that the Anglo-Saxon society should be considered in terms of the notion “local network” that involves dynamic human relations and exchanges of goods. This view stands in sharp contrast to but complements the prevailing view of the early medieval period where it is characterized only as the formative period of the feudalism and the manorial system.

交付決定額

（金額単位：円）

	直接経費	間接経費	合計
2007年度	1,000,000	0	1,000,000
2008年度	900,000	270,000	1,170,000
2009年度	700,000	210,000	910,000
2010年度	600,000	180,000	780,000
年度			
総計	3,200,000	660,000	3,860,000

研究分野：イングランド中世史

科研費の分科・細目：史学・西洋史

キーワード：アングロ・サクソン史／社会経済史／協働行為／ウスター司教座／史料論／文書史料

1. 研究開始当初の背景

本研究の背景には、中世初期イングランド（アングロ・サクソン期）史に関する、イギリス学界での研究の深化と歴史イメージの書き換え、および研究代表者による個別研究の蓄積がある。具体的には、

(1) イギリス学界における動向

近年のイギリス学界では、非文字史料の分析という新しい方法論を基礎に、市場を介した人や財貨の移動、宗教や秩序維持を背景とした生活圏の検出などが試みられ、従来の荘園制・封建制という枠組みだけでは説明できない中世初期社会のあり方に関心が寄せられている。これに対して、荘園制研究の分野では、荘園の特質は所領の社会経済的自己充足性に求められており、「外部に閉じられた荘園」という伝統的な見解も維持されてきた。

(2) 研究代表者によるこれまでの成果

ミッドランド西部に位置するウスター司教座所領の検討を進めるうちに、領主権の成長を看取すると同時に、都市市場と周辺農村との結び付きや、塩生産を基軸とした広範な流通圏の存在など、領主権に回収できない側面をも見出した。ここからは、荘園制を含めた、農村全体史を構想する必要性が浮び上がってきた。

以上の研究状況をうけて、中世初期社会の動態的かつ立体的把握という新しい動向をいっそう進展させるために、本課題は構想された。

2. 研究の目的

本研究は、アングロ・サクソン期社会の形成と変容を新たな視点から描写することを目的とした。その際のキーワードが、人や物の結び付きとそれが動態的に創りだしていく「地域」であり、その展開を長期的かつ包括的に追求することを目指した。その際の目標は以下の通りである。

(1) ネットワークとしての把握

ネットワーク論という視点を全面的に採用しながら、地域社会の形成を論じる。つまり、諸制度の構造と展開だけに着目するのではなく、人、モノ、情報、文化、空間、時間などの相互をつなぐ多層的な関係性の展開がひとつの制度と地域社会を歴史的に構築するという考え方にたった方法を用いる。

(2) 領主＝農民関係についての柔軟な見方

中世農村史研究で支配的な、領主制説と共同体説という二項対立的枠組を越えて、領主と農民の有機的諸関係を解明していく作業

に努める。また、ある領域に複数の権力関係が重層するさまに着目し、地域の複雑な権力構造（力学）を明らかにする。

(3) 多様な史料の利用

①権利譲渡文書の利用：文字史料の中では、農村史研究にそれほど用いられなかった権利譲渡文書を、動態的・長期的な検討を可能とする史料として用いる。

②隣接諸科学の成果の導入：歴史地理学、考古学、地名学等、隣接諸科学の成果を導入して、流通や宗教的要素、国政への参加を契機とした村落外部との繋がり（「地域社会」の形成）を追跡する。

これらの特色を前面に押し出すことによって、荘園制や地域ネットワークを含めた中世初期社会の構造を、立体的に描き出すことを目的とした。

3. 研究の方法

史料と先行研究の豊富な、7世紀末から11世紀末西部ミッドランドを主要な分析対象とし、「地域」の基礎として、人々が共有する経済圏・政治圏などの経験領域を検証した。

(1) 研究史の再検討

まず、財貨の流通や市場活動、人口の移動など、ネットワーク空間の存在とその広がり示す仕事に注目しつつ研究動向を整理し直し、自らの実証研究の座標軸を確定した。

(2) 史料分析

次に、上記で確定された視点にもとづきながら、史料の分析を進めた。

①権利譲渡文書：ミッドランド西部の有教教会であったウスター司教座に伝来する文書を中心に、そこに現れる複数所領の結び付きに注目した。そしてこのネットワークがいかなる意味を持つかを、考古史料や他の文字史料と比較検討することで明らかとした。また、文書に記された証人の検討を進めることで、特定の所領に関して証言能力を持つ証人がどの範囲から招集されているかを考察し、地域の記憶やアイデンティティの形成という側面に接近するための準備作業とした。

②『ドゥームズデイ・ブック』：1086年作成の全イングランド的調査『ドゥームズデイ・ブック』に現れる集落間のネットワークに着目して、この繋がりがいっ、何を契機に形成されたかを、上記の権利譲渡文書の検討結果を手がかりに考察した。

③史料論へのまなざし

史料の検討にあたっては、中世初期イングランド社会において当該史料が持っていた意味、またその機能の仕方といった点に目を向けることで、史料をより有効に、積極的に活用できるよう心がけた。

4. 研究成果

本課題の研究期間を通して、主として以下のような成果を得た。

(1)都市＝農村間ネットワークの検出

期間の前半は、都市＝農村関係に焦点を絞って考察を進めた。具体的には、10世紀以降のウスター司教座関連文書に登場する、司教座集落ウスターと農村とがリンクした型の所領に注目し、その結合の性格と意味を追跡した。考古学の成果も援用しつつ、文書を分析した結果、

①ウスターでは、司教座創設当初から、王権の保護を受けつつ司教座主導で中心地機能の強化が押し進められていたこと、

②宗教、経済、防備など複数の中心地機能が漸次的に蓄積された結果として、10世紀以降には都市住民の顕著な増加も確認できるが、その中で農村領主が都市内に屋敷地を有する、いわゆる都市＝農村リンク型所領が散見されるようになったこと、

③『ドゥームズデイ・ブック』の検討から、文書に登場する以上に都市＝農村リンク型の所領の事例が認められること、などが明らかとなった。

以上から、ウスターの都市的機能が農村経済に重要な役割を果たしていたとの結論を導き出した。近年の荘園制研究では所領の自己完結的性格を強調する立場が有力であるが、本考察は、むしろ具体的な地域ネットワークの解明こそが必要かつ有益であることを、ウスターと周辺農村との関係から例証した。

(2)文書に見られる人的結合関係への注目

研究期間の後半は、文書史料の新たな利用を目指し、大陸学界の成果も積極的に摂取しつつ、文書の変動と社会の変化という視角からアプローチした。

①カイログラフの総合的考察

9世紀頃から新たに登場した文書実践（割り印文書カイログラフの作成）に注目し、その社会的背景—それまでの文書保証システム（＝証人欄に記載された多数の人物の「記

憶」による）からの本質的変容を示すのか等—を検討するための準備作業を進めた。比較のためにミッドランド西部からイングランド全域に対象を広げ、1500通ほどの伝来文書（カイログラフ以外も含む）に目を通した結果、

・カイログラフは王以外が発給した私文書での慣行であること（真正性に問題のないカイログラフのうち、私人により発給されたものが95%を占める）、

・カイログラフの伝える内容は、土地譲渡のみならず、期限付きの貸与、交換、売買、遺贈そして係争の経緯などの多岐に渡ること、

・カイログラフには、従来の文書と同様、多数の証人名が記載されていること、

・カイログラフの採用には、作成者である教会文書所毎の傾向があること、などの諸点が浮び上がった。

これらを総合的に判断すると、アングロ・サクソン後期における私文書でのカイログラフの採用は、証人システムにおける重大な変更（記憶から記録へ）を示すのではなく、私人間での土地取引の活発化・多様化を背景に、文書が積極的に利用されるようになったこと（＝文書への信頼および文書活用能力が高まったこと）を示すとの仮説が立てられる。この点では、俗人を含めた広範な層にリテラシーを認める、近年の西欧中世史料論研究での動向を、追認することとなった。

②カイログラフの宛先への注目

カイログラフは主として文書に記載された行為の当事者に宛てられるが、分析の過程で、その他の人物・組織による保持を目的とした、三部・四部作成（分割）文書の存在を確認した。宛先に指定された第三者は、文書の内容を保証する上で、証人欄に記載された従来からの証人たち以上の役割を期待されたはずだが、その選択基準としては、当事者との地縁関係や第三者の社会的・政治的地位を想定することができた。以下で述べるように、ここから看取できる人的結合関係の詳細についての本格的検討は、今後の課題として残されている。しかし少なくとも現時点で指摘できるのは、これらの事例が、アングロ・サクソン期における社会秩序が、従来重視されてきた主＝従関係以上に多彩な要素から形成されていたことを示唆し、それゆえ、こうした人的ネットワークの結びつきを丹念に追っていく作業を要請しているということである。

結果として、研究期間を通じて得られたこれらの成果は、中世初期を封建制・荘園制の形成期とする従来の見方に再検討を迫るものとなった。そして、モノや人の結びつきを

取り上げることで、動態的で立体的な社会像を描写しようとする本研究での試みは、このところ低調な我が国のアングロ・サクソン史研究を、活発化する一助になったと自負している。

(3) 今後の展望

今後の課題としては、カイログラフから明らかになった人的結合関係を、地域論との接合をより強く意識しながら実証・理論化していくことがあげられる。具体的には、

①文書や聖人伝などの史料から、人々の協働行為が行われる「集会」assembly を再現し、人的結合関係の具体的事例を収集する。

②集会の参加者とその地理的出自を可能な限り特定する。その上で各々の集会の性格を他の記録も援用しつつ見極め、人的ネットワークの役割とそれが作り出す「地域の形」を提示する。

③法典やドゥームズデイ・ブックを用いて、「地域」と諸権力（王権・領主権など）との重層的関係を明らかにすることで、立体的・動態的な中世初期社会像を浮かび上がらせる。

以上のように、アングロ・サクソン期社会の展開を、人々の協働行為から形成されるネットワークに着目して追求しようとするこの試みに対しては、「中世初期イングランドにおける地域社会の形成—ミッドランドの人的ネットワーク—」として、新たに科学研究費補助金の交付が決定している（平成 23 年度～平成 25 年度、若手研究 (B)：課題番号 23720366）。この好条件を活用して、研究の着実な進展を図りたい。

5. 主な発表論文等

(研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線)

〔雑誌論文〕(計 4 件)

- (1) 森 貴子、「中世初期イングランドにおけるカイログラフの登場—社会背景解明に向けた予備的作業—」、『愛媛大学教育学部紀要』、57 巻、2010 年、213～225 頁、査読無。
- (2) 森 貴子、「アングロ・サクソン期ウスターの都市的発展と司教座—所領経済の解明に向けて—」、『西洋史学論集』、45 巻、2007 年、43～59 頁、査読有。

〔図書(翻訳)〕(計 1 件)

ウェンディ・デイヴィズ(編)／鶴島博和(監訳)、慶應義塾大学出版会、『オックスフォード ブリテン諸島の歴史 第 3 巻 ヴァイキングからノルマン人へ』(刊行確定。森 貴子担当分は「第三章 交換、交易そして都市化」および「第六章 書くこと」)、2011 年。

6. 研究組織

(1) 研究代表者

森 貴子 (MORI TAKAKO)

愛媛大学・教育学部・准教授

研究者番号：10346661

(2) 研究分担者

(3) 連携研究者